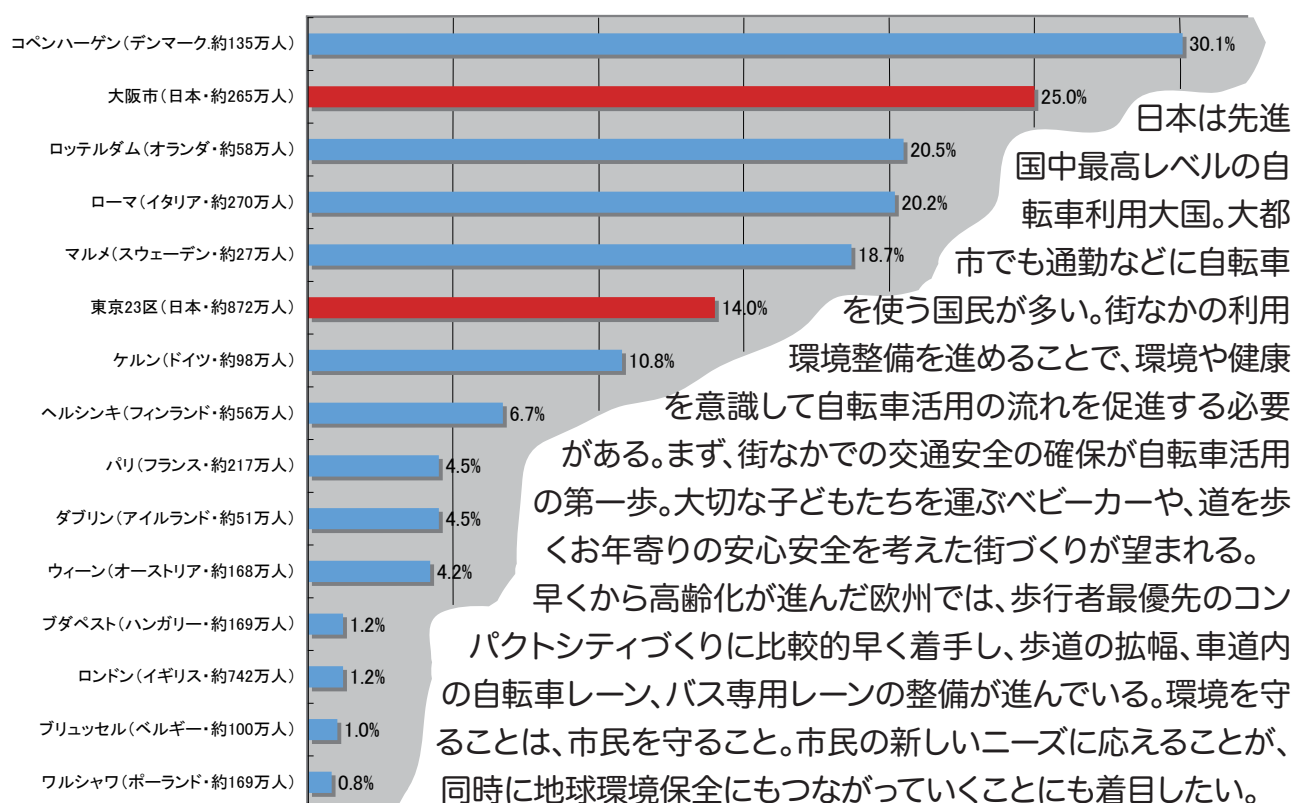


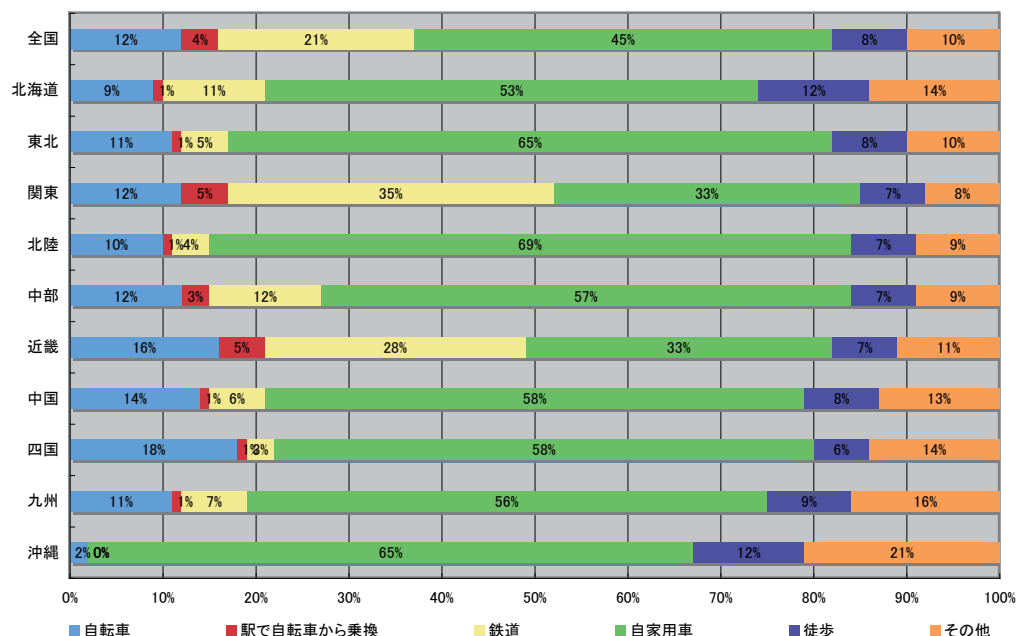
○大阪・東京は先進国の都市中トップクラスの交通分担率

・自転車を活用している世界の都市ベスト15 【交通分担率に占める自転車利用】



○主に通勤に使われる交通手段

【平成12年国勢調査などから推計・国土総合研究所】



○大都市圏では自転車で駅まで来て電車に乗り換える通勤客が5%と多く、放置自転車問題が自治体の課題
○駅までの自転車より、実は目的地までの自転車が倍以上多い
○住民のニーズに応え、自転車対策を「放置」一辺倒から、「活用」に転換する必要がある

健康

○寝たきり防止にも貢献

・自転車をこぐ運動は、起き上がる、立ち上がるための筋肉(太ももの筋肉や腸腰筋など)を鍛える。ペダルを軽くこいで膝を上げ下げするだけで一定の効果があり、有酸素運動は格好のメタボリック症候群対策、スリムな脚線美も。

○美容と健康に

・ウォーキングなどに比べて、自転車こぎは血流速度を簡単に上げることができるため、血管年齢を若く保つ運動として注目。同時にバランス感覚も養うことができ、アンチエイジングに役立つ運動として見直されている。

急速に少子高齢化が進むわが国では、今後、子どもたちを運ぶベビーカーや、道を歩くお年寄りの安心安全を考えた街づくりが最優先課題のひとつとなる。早くから高齢化が進んだ欧州では、歩行者最優先のコンパクトシティづくりにも比較的早く着手し、歩道の拡幅、車道内の自転車レーン、バス専用レーンの整備が進んでいる。

たとえば、狭い路地が多く、歴史的建造物のために道路の拡幅が不可能なフランスの首都・パリでは、1995年にわずか8.2キロメートルしかなかった自転車道路網(自転車専用道路、自転車専用レーン、一方通行道路における自転車逆走可区間、自転車通行可のバス専用レーン、その他)を、2008年には400キロメートルにまで延ばした。市民の足としてトラムやヴェリブ(レンタル自転車：●ページ参照)などを整備して、市内のクルマを抑制する政策を実行した結果、2001年から2006年までの5年間でクルマの利用は13%減、公共交通機関の利用者は5%増(地下鉄は7%増)という効果を生み出し、32%の大気汚染と9%の温室効果ガスの削減につながった。(2006年パリ交通調査)

また、北欧を中心に40年ほど前から普及していたトラック代わりの運搬用自転車が、1995年以降、子どもを複数載せられるベビーカー自転車に発展し、ヨーロッパの街でよく見かけるようになった。少子化が進むなか、子どもと母親を社会全体で守ろうとする風潮を背景に、自転車

専用レーンの普及、出会い頭の事故が起きにくい道路設計、交通ルールの徹底などが行われている。



上の写真2点提供：屋井鉄雄東京工業大学教授



↑ 京都の繁華街を行くシニアカー



← 幹線道路につくられた歩行者用地下通路。健常者や元気な子どもたちを想定して建設されているが、車イスやベビーカー、高齢者の自転車の安全についても考えるべき時代になった。

第2章

先進自治体の取り組み

手法(1)市民に参加を呼びかける	10
手法(2)いっそのことクルマを不便にってしまう	12
手法(3)安心して駐めればマナーも向上	17
手法(4)専用・バス共用レーンなど環境づくり	20
手法(5)安全確保が活用の第一歩	23
手法(6)もっと自由に、もっと広範囲に	24
ヴェリブ成功の背景と導入における課題	25
手法(7)まず自治体職員がやってみる	26

■手法(1)市民に参加を呼びかける

オーフス（デンマーク、約25万人）

「バイクバスターズ計画」

市の中心部から3～7km圏内に住み、中心部の勤務先にマイカー通勤している175人(応募1,700人)に1年間、約13万円相当の自転車(距離メーター付)を貸与するとともに、1年間(1995～96年)市内全域で通用するバスの定期券を支給。できるだけ自転車かバスの利用をしてもらい、アンケート調査への協力を要請。

参加者のミーティングでプロジェクトの目的を説明するなど、自転車に乗る際のアドバイスをし、2カ月に1回、ニュースレターを発行。希望者には、開始前、途中、終了後の3回健康診断(体重、血圧、心肺機能、血液検査、コレステロール値など)を実施。このほか、手袋、雨合羽、キャンペーンのロゴ入りバスタオルなども提供。貸与自転車は終了後、希望者に約2万円で払い下げられた。

終了後の調査結果 自転車通勤は夏には70%(マイカー20%)に達し、実施後も56%(同34%)になった。

実施主体はオーフス市役所、デンマーク自動車連盟、オーフス警察署、デンマーク自転車販売協会、地域の自転車店、デンマーク心臓協会など。必要経費は約7,800万円で、デンマーク環境保護庁、デンマーク交通評議会、オーフス市が3分の1ずつ負担。

オーデンセ（デンマーク、約14.5万人）

「幼児・両親を対象にした自転車利用・徒歩キャンペーン」

目標の施設まで、自転車か徒歩で行くと、クジが1枚もらえる。2週間実施され、クジを求めて子どもたちが毎日参加。3,100人以上の子どもが54以上の施設に行く。2週間で自転車の利用回数は12,000回以上に達する。

ほかに、「小学校高学年を対象にしたクラス単位の自転車走行距離コンテスト」「自転車フェスティバル(年1回)」などを実施。

ミュンスター（ドイツ、約27万人）

「自転車アクションの日」

子どもが自転車に乗る楽しさを身につけながら、自転車交通に関する情報を学ぶ機会にしている。ドライバー向けのポスター「自転車に気をつけて」を掲出。市役所前とバスの車体に、クルマ、バス、自転車がそれぞれどれほどの空間を占拠しているかを写真で示したポスターも。

アーヘン（ドイツ、約26万人）

余暇に利用するサイクリングルートを広く知ってもらうため、1994年にルート網が示されているカードを作り、5,000枚を無料で配布。95年に2度目に発行された改訂版は、イラストが入ったパンフレットと一体の「アーヘン市自転車ツアーセット」として、有料で販売された。

ローマ（イタリア、約270万人）

「エコロジーサンデー」

チェントロストリコ(歴史的中心地)内で月1回(日曜日)、19区ごとに展開。この日、対象地区内でクルマを使うと、100ユーロの罰金。